

2019年1月6日の説教（要旨）

聖書：ローマの使徒への手紙 6章 1～4節

説教：「新しい命に生きる」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

罪の支配にまさる神の恵みのご支配をパウロは高らかにうたってきました。彼は「律法が入り込んで来たのは罪が増しく加わるためでありました。しかし、罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました」（5：20）とさえ語りました。けれどもパウロは、律法を忠実に守って神に仕えようとしてきたユダヤ人たちがそれに対してどんなに反発するか、そしてユダヤ人だけでなく、律法にこだわらない一般人でも、パウロの語る福音に対してどんな誤解や曲解をするか、その危険を十分に察知しているのです。そこでパウロは、神の恵みによって救われるとはどういうことかを6章で語っていくのです。

「では、どういうことになるのか。恵みが増すようにと、罪の中にとどまるべきだろうか。決してそうではない。罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なおも罪の中にいけることができるでしょうか」（1～2節）。あなたはどうか考えるのか、とパウロは問いかけます。罪の中にいた方が、恵みが満ちあふれ救いがよく分かるのなら、ずっと罪の中にいた方がよいではないかとは、愚かな反論であり屁理屈です。けれども、こういう反応は私たちの中にも生じてくるのではないのでしょうか。

放蕩息子のたとえがあります（ルカによる福音書 15章）。父の家を飛び出し放蕩に身をもちくずした男が、落ちぶれ果てて帰ってきます。その息子を父はずっと忘れず待っていて、喜び迎えたのです。ところが、父のもとでずっと働き続けてきた兄は、父の振舞いを見るや不機嫌になり喜びの祝宴に出ようとしなかったというのです。この兄の気持ちはよく分かります。私たち自身は、誰しも神の前にどうしようもない放蕩息子なのですが、そのことはすっかり忘れて、どうせ赦してもらえるのなら放蕩息子であった方が得だとか、もうしばらく放蕩息子のままでいようなどと、ねじれた考えを持つことがあるのではないのでしょうか。

これは、大きな恵みをいただきながら、その恵みに感謝してお応えしていこうとするよりも、かつての自分の状態に居直り、居座り、いつまでも甘えていたいという気持ちです。立ち上がろうとしないで、うずくまってしまうのです。そこにもまさに神を忘れた私たちの不従順の罪があります。

こうした私たちの内に生じる誤解、曲解、ねじれた考えに対して、パウロは「決してそうではない」と言うのです。この短い否定文はパウロがこの手紙で何度か使う強い打消しの言い方です。絶対にそんなことがあってはならない、というのです。「罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なおも罪の中に生きることができるよう」。私たちは主イエス・キリストによって、罪と死の支配圏から引き離され、神の恵みの支配圏に移されたのです。キリストの新しい命と新しい生き方の中に招かれているのです。

エリコの町で起こった主イエスと徴税人ザアカイとの出会いの物語も印象的です。いちじく桑の木の上から高みの見物をしていたザアカイに、主イエスは声をかけられ、彼の家に入っていられました。この夢にも思わなかった出来事の中で、ザアカイは「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを4倍にして返します」と言いました。その時、主イエスは「今日、救いがこの家を訪れた」と言われます。ここにザアカイの救いが生じ、新しい生が始まっています。罪の赦しは、主イエスが引き起こしてくださった新しい生と切り離すことのできない一つの出来事なのです。

そこでパウロは言います、「それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けた私たちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを」(3節)。自分が授けられた洗礼のことを考えてごらんください、と語りかけるのです。ここで「キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けた私たち」とは、原文通りに直訳すると「キリスト・イエスの中へと沈められた私たち」という言い方であり、さらに「キリスト・イエスの死の中へと沈められた」ということなのです。

滴礼であれ浸礼であれ、どんな形の洗礼式であつたにせよ、大事なことは、私たちがそこでいったん葬られたということです。古い自分自身に死んで、キリスト御自身の命によって新しい生へと招き入れられたのです。「わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです」(4節)とあります。「新しい命に生きるため」の「生きる」とは「歩む」という言葉で、歩み始めるという動作の開始をあらわす表現になっています。新しい日常の生き方が始まるのです。

洗礼は古い自分が葬られ、キリストのくださる新しい命に歩み始めることです。しかし、それはそういう気分になれたからできるとか、なかなかそんな気分になれないからできないというものではありません。忘れてはならないのは神の先立つ一方的な恵みと招きです。そして、洗礼における死と葬りと復活というのは、イエス・キリストの一回的な十字架と復活にあずかること、結びつけられることです。一回的にキリストの死の中に入れられ、キリストの新しい命によって生きるのです。私の気持ちや感覚ではなく、キリストがしてくださることなのです。その中で、私たちは生涯、日毎の悔い改めをもってキリストと共に歩むのです。私たちはすでにそのような恵みの中にすでに招き入れられています。まだ洗礼を受けておられない方たちも、もう今招かれているのです。